

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔話に、「わらしべ長者」というものがある。

昔、貧しい男がいた。男は観音さまに富を授かるよう祈願した。すると、最初に手につかんだものを大切にせよとお告げがあった。男が最初に手にしたのは何のとりえもないわらしべ（わらの屑）であったが、お告げを信じてこれを捨てずに持ち歩いた。

飛び回るアブをそのわらしべでしばって持ち歩いたら、道行く子供がそれを欲しがったので、その母親が持っていたミカンとわらしべを交換した。すると、のどが渴いて水気のあるものを探していた商人と出会ったので、商人が持っていた半端の反物とミカンを交換した。

次には旅を急いでいるのに、馬が倒れてしまった武士と出会った。そこで、その反物と道に倒れた馬とを取り換えた。幸いにも、馬を介抱したら元気になった。馬を連れていけると、これから旅に出るため馬を欲しがっている人に出会い、馬と引き換えにその人の屋敷に住んだ。ところが、旅人はいつまでたっても帰らなかったで、屋敷は男のものになり、男は裕福になった。

「わらしべ長者」の物語では、特段の努力をせずにただ道を歩いてただけで、つまらないわらしべが最後には高価な屋敷に化けたという、男の驚くべき幸運に注目が集まるようだ。実際、「わらしべ長者」をキーワードにインターネット検索をしてみると、少ない元手で楽をして大もうけというたぐいの話が山ほど出てくる。

^A話に面白みをつけるにはこれでもよいかもしれないが、この点に気を取られてしまうと、「わらしべ長者」は実直な勤労の美德と価値を否定する、子供には有害な話とみなされかねない。経済学者としては、「わらしべ長者」が労せず大もうけの意味に解釈されるのは大変残念なことだ。なぜなら、「わらしべ長者」は、経済学の視点で見ると非常に興味深く、有害どころか親子でじっくり味わうべき話だからだ。ここには、自発的な取引によって経済学的な利益が生まれ、さらに取引に参加したすべての人たちは利益を受け取ることができる、すなわち交換による経済学的価値の創造という、教科書の第一章に出てくる経済の基本原則が美しく表現されている。

自発的交換による価値創造の原則は簡単明瞭である。自発的な双方の合意のうえで交換されるためには、交換に応じる双方にとって、交換前よりも交換後の状態の方が好ましいものでなければならず、その差がまさに交換によって得られた価値にほかならない。

話に現れる取引を振り返ると、断ろうと思えば断れるものばかりだったから、話の中でももちろんこの原則は成り立つ。わらしべを家に変えた男が大いに利益を得たことは言うまでもないが、ほかの人たちも利を得ていることを忘れてはならない。

子供にとってはミカンよりはわらしべのおもちやのほうがはるかに魅力的なものだったから、ただのミカンでとても面白いものを手に入れたと喜んだはずである。反物商人も、売れるかどうかかわからない余分な着物よりは、ミカンでのどを潤すほうがはるかに良かった。死にかけている馬を手放して新しい着物をもらった人は、良い取引をしたと感じたはずだ。旅に出なければならない人にとっては、家よりも馬のほうがはるかに貴重なものだったはずである。

問一 傍線部Aとは、本文ではどのようなことか。最も適当なものを、次から選べ。 **文脈**

- ア 「わらしべ長者」をキーワードにインターネット検索をしてみること。
- イ 「わらしべ長者」を真似して、実際に少ない元手で楽して大もうけすること。
- ウ 「わらしべ長者」の話を、少ない元手で楽して大もうけの話と解釈すること。
- エ 「わらしべ長者」のように、つまらないわらしべが最後には屋敷になること。
- オ 「わらしべ長者」の男が、観音さまのお告げを最初から最後まで信じていたこと。

問二 本文の内容に合致するものを、次から一つ選べ。 **全体把握**

- ア 「わらしべ長者」の登場人物はみな、自主的な交換を行い交換前よりも利益を得た。
- イ 「わらしべ長者」は実直な勤労の美德を否定する、子供にとって有害な話である。
- ウ 「わらしべ長者」は教科書の第一章で取り上げられるほど、興味深い昔話である。
- エ 「わらしべ長者」の話は、交換後より交換前のものの市場価値が高かったため成立した。
- オ 「わらしべ長者」で注目すべき点は、男の驚くべき幸運でなく信仰心の大切さである。

問一 ウ

問二 ア